

## Conrad の scope 限定と詩

—The Shadow Line における—

東 義 郎

Conrad は1910年に *Under Western Eyes* を完成したが、以後の創作は衰退の一途をたどる。24年病歿するまでに彼は更に長篇7（中1つは未完）、短篇9を出したが、そのどれも前期、中期の水準に遠く及ばないものである。しかし17年作の *The Shadow Line* のみは例外であって、これは単に後期の代表作であるのみならず、彼の全作品の中でも最高の位置を占めるものの一つであると思われる。<sup>(1)</sup> その成功の原因として、われわれは二つを挙げ得るが、第一はこの作品では、彼の scope 即ち視野が他の作に比して限定されていること、第二は海の詩人としての Conrad の真価が発揮されていることである。<sup>(2)</sup>

### I. *The Shadow Line* の位置

Conrad は英国の小説史では、Bennett, Wells, Galsworthy 等と並び立つ、主要な作家の一人であると一般にみなされている。しかしその小説は彼等のそれとは大分趣を異にするものである。彼は海や東印度をその最上の作品の舞台としたばかりでなく、その手法は勿論、その精神においても根本的に彼等と異っている。Conrad にはこの三人に多少ともみられる唯物主義的傾向は全然なかった。彼は物質的進歩には殆ど無関心であり、流行の思想にも興味を持たなかった。彼が小説によって書かんとしたのは、人間と自然の戦いであった。

作家としての彼の活動は、その小説において使用した舞台や背景より三期に分けることが出来る。各時期の作品の一般的特徴を次に述べることとする。前期では彼は船乗りとして経験した世界に材料を求め、かなりすぐれた作品

が相次いで生れた。力と微妙の組合せ、詩的情熱、背景と文体の魅力、これらは独得のものであり、Conrad は主に前期の作品によって文学史に名を残すことになるであろうと思われる。<sup>(3)</sup>この期の文体に大きな影響を与えているものは、彼がそれまで直接仕えて来た、大いなる、人間の拘束を許さない自然である。

「東洋の呪文のような」音楽的リズム、力強い自然的感情の韻律は随所に現われる。<sup>(4)</sup>前期の半ばになると、この抒情的衝動は完全に自由であり、しかも芸術的に統制されるようになる。

中期は1904年から始まり1912年で終るが、彼の円熟した創作力が発揮された時期である。作品の舞台は南米、ロシア、スイス、ロンドン等であって、海や森は殆ど描かれない。出来るだけ事物を明確に表現せんとする、幾分皮肉な芸術家としての彼が示され、前期における抒情的脈動は全く止み、重々しく確かな文章のリズムが感じられる。

後期になると彼は再び前期の世界に帰る。東洋の海や森が表現されるが、前期で扱わなかった、英国に彼が来る以前の、フランスやスペインにおける経験からも取材している。この期のものは彼の概して不得意とする男女間の愛を正面から取上げることが多いことにもよるであろうが、<sup>(5)</sup>文体は散漫で不正確な表現も目立ち、且つ厳しい彼の主題から空想的ロマンスの世界に逃れんとする傾向が見られる。

*The Shadow Line* は先にも述べた如く、後期に属するものであるが、作品全体の中においてその占める位置を明かにするためには、少くとも他の二、三の代表的作品について説明をなす必要がある。そこで以下において *Heart of Darkness*, *Lord Jim*, *Nostromo* の三作を少しく論ずることにする。

#### (1) *Heart of Darkness* (1899)

Arthur Symonds は云う、「Conrad は不可思議な一種の催眠術によって奇怪な未知の世界を創り出した。彼は自らの織った世界の隅に恐い蜘蛛のようにかくれ、たこのように闇の中に手を伸ばす。その蜘蛛の巣の中心には偉大な irony が座っていて、人事を冷酷に皮肉に微笑しながら批評し、その背後には

陰險な魔神がうずくまっいて、自ら慰むために悪を生み出している。」<sup>(6)</sup>

Symons の言葉はかなり誇張的であり、又 Conrad の作品の凡てに適用されるものでもないが、Conradには疑いもなく、かかる批評を招く面があったのであって、この短篇、*Heart of Darkness* はその代表的作品である。

既に述べたように、彼が真剣な努力を傾けた作品の殆ど凡ての主題は、自然と人間との戦いであったが、その自然は人間に敵意を抱く自然であり、彼には悪の象徴と感じられたものであるが、それは又人間の内部にひそんでいるもの即ち人間性の自然でもあった。そしてその戦いは始めから人間に勝算のない、悲劇的な戦いである。彼の目的としたものは海やジャングルの冒険談ではなく彼自身語るところによると、海以上に広い人間界の大洋であった。彼が発見し、熱中し、表現せんとしたのは、人間の悲劇、生の不均衡な戦いであり、その世界は善が悪にのみこまれる救いのない世界である。

彼のかかる悲観主義の原因として、われわれは直ちに幾つかのものを挙げ得る、即ち、ロシア圧政下のポーランドに生れ、両親を革命運動のために失った特殊な生い立ち、船乗りとして安全性が汽船よりも少い帆船で何度も大洋を渡った経験、コンゴ地方探険以来マラリア性痛風に最後まで悩まされたこと等々であるが、これらは凡て推測を出ず、又彼の *pessimism* の因を探ることはこの小論の意図とすることでもない。

*Heart of Darkness* は自伝的な作品で、（彼のすぐれた作品の多くがそうであるが）少年時代より憧れていたコンゴ地方の探険を実現するためアフリカ大陸開発会社に雇われ、奥地の河を航行する小汽船の船長として任地に赴き、三年間の服務の後病を得て帰国したが、（これは非常な幸運というべきであって、当時コンゴ地方に出かけた白人の殆どは生きて戻らなかった）その時の印象経験に基いて書いたものである。主人公も実在した人間を模し、Conrad 自身 Marlow なる人物として登場する。

主人公の Kurz は会社の代理人だが、ヨーロッパ人がコンゴで進歩という名で呼んでいる無益、墮落、恐怖の凡てのシムボルである。貧慾と残酷、裏切りによって、原住民を食い物にすること、それが白人によって進歩と呼ばれてい

るのだ。この暗黒の大陸に入っていく Marlow は何度となく、Kurz の名がある時はその勇気と智慧に対する崇拜的口調で、ある時は激しい嫉妬と憎しみのこもった響きを以て人々によって語られるのを聞いた。周囲の俗物共に反感を覚えた Marlow は、この Kurz に何となく親近感を抱き、会うことを熱望する。しかし Marlow が闇の奥に入っていくにつれて、ある疑惑が段々と強まって来る。Kurz の不気味な、非人間的なところが少しづつ仄めかされて来るのだ。そして遂にはこの冒険的商人は、ぞっとするような超人間的怪物となり、敵意ある自然と全く同質のものとなる。かくしてこの人間の暗さと不思議さはその土地の野蛮と神秘に調和し、共に恐怖の雰囲気盛り上げる。

この驚くべき効果は用心深い計算によってもたらされたもので、種々な暗示や挿話的事件、及び巧みなイメージの結合によって累積的に強められる。ただ人物描写は不十分であって、Kurz は自然との戦いに敗れた一種の理想家なのか、それとも単なる偽善的利益追求者なのか不明瞭であり、又 Marlow 自身も Kurz を如何に見るべきか迷っているのも、全体的印象は曖昧で悪夢のようである。それにしても物すごいエネルギーに満ちたジャングルのイメージや壮大な森の緑のカーテンの中に閉ざされた上流の描写は忘れ難いものである。

## (2) Lord Jim (1900)

自然との戦いで多くの者は敗れる。人間は唯, fidelity, courage, patience 等の人間的徳によつて自然に勝つことが出来るが、かかる徳が実践されるためには、適当な諸条件の組合わせを必要とするのだ。Conrad はこのような人生観を抱<sup>(7)</sup>いていたが、彼の興味は専ら人間の敗北にあり、人間の弱さを分析することにあった。そこで彼の小説では人間をその弱点に致命的な環境と戦わせる。彼の心理は彼の道徳的想像の僕なのだ。Lord Jim は彼のその興味を最もよく示す作品である。

主人公の Jim は一汽船の高級船員であるが、ある悪魔的な環境の力、つまり自然との戦いに負けて、彼の船が何かに衝突した時、無意識的に他の卑怯な船員等と共に船を棄て、船客を置き去りにする。彼は深く自分の行為を恥じ、

この事件が噂に上る場所を逃れて東洋の港から港へと転々する。遂には白人の一人も居ないマレーの土人達の間に入って生活し、彼等の尊敬を受けるようになるが、そこでも又彼の性質に致命的な事件が起って、そのために最後を遂げる物語である。

*Lord Jim* は Modern Library 版では約400頁の長篇であるが、その形式は非常に複雑、しかも巧妙を極めており、*Chance* (1912) と共に Conrad の最も複雑な手法を示すものである。

彼は人間の複雑性、変幻自在性を重視するが、小説家としての彼の問題は人間の全体を捉えることであった。一人の人間を描く場合、その人間を見つめるレンズの完全な焦点を発見することが必要なのだが、その焦点は複雑な人間にあっては絶えず移動し、又それは決して一つだけではない、と彼は考える。作中の主人公についての事実は彼を取巻く凡ての人々の事実と結びついているのだから、様々な人物が呼び出され、それぞれの立場から主人公に光を投ずることになる。多くの人々の観点を利用しつつ、しかも作品に統一を与えること。この問題が生じて来るが、Conrad はそれを説話者 Marlow を小説中に引入れて解決した。*Lord Jim* 以前の作品では中心点がぼやけて来る傾向があったが Marlow は色々な角度から見たものを綜合する役割を担っているのである。

*Lord Jim* では形式上更に注意すべきことがある。それは時の正しい順序を追わずに物語を進める方法である。概して彼は人物を先ず読者に強い印象を与えるような方法で描き、それから物語をクライマックスに導く劇的な現在を述べる前に、過去へとさかのぼる傾向があった。しかし以前の作ではこの方法は時に単なる挿入の感を与え、あるいは又あたかも物語がひとり先走って、作者は元に戻って話しを語り直さねばならぬかのようにもあった。ところが *Lord Jim* では中々うまくこの方法が用いられている。正しい時の順に従って述べられる小説のそれぞれの章を A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M, N, O, P, Q, R, S, T, U, V, W, X, Y, Z, とすれば、この作品の各章は、KLMP, WA, E, B, E, E, H, GD, HJ, FE, E, F, F, F, FK, I, I, R, I, KL, MN, N, Q, QPO, OP, P, QP, P, P, P, QP, P, P, Q, Q, Q, R, ZV, YX, S, S,

S, TY, U, U, U, WXY となる。

(8)

これは先に述べた各方面から対象に光りを投ずる方法と同じように Conrad の生に対する激しい興味や彼自身の船乗りとしての経験より自然的に得た方法であり、効果的に語らんとする方法の一つなのだが、それだけでなく、人間性は捉え難く複雑であるという観念を背後にひかえていることは否定出来ない。対象を明るく、新しい遠近法によって捉えるために、カメラを時の前後に動かすのだ。人物の心の奥にまで読者を導くために彼はこのような方法を用いたのであり、様々な感情の交錯、野心と本能の継ぎ剥ぎ細工、現在における過去、魂の動揺せる戦い等を表現するには、従来の伝統的小説の方法では不十分と感じたのだ。

彼は実に休むことを知らぬ小説形式上の実験家であって、深く方法に心を奪われ、不断に芸術的完全を追求していた。「Henry James や Conrad 等の余りに芸術的に厳しい雰囲気から恐れをなして退散した」とは Wells 自身の言葉である。ところでわれわれの当面の問題は、彼の複雑巧妙な方法によって得られた結果如何の問題である。*Lord Jim* の作品効果は果して十分満足すべきものであるか。答は否である。*Heart of Darkness* の場合と同じく、主人公 Jim の人間は最後まで影のように漠として生きた人間として感じられぬ。唯 Kurz と異って Jim は romantic な霧に包まれていることが、この作を大衆的なものになっている。作者は凡ゆる努力を払って Jim を外面から理解し、その内部にまで迫って行こうとしているが、その努力も遂に徒勞であった、という不満な印象をわれわれに残す。理解していない人間を描こうとした作者のそもそもの出発点が問題なのではないかという疑問すら抱かせる。

「小説の一般的効果は生が人間に与える一般的効果ではなくてはならぬ。生は語らず、唯われわれの頭に印象を残すだけだ。」Conrad はこのように考えていた。小説において生きた人間を一般的に云って彼が書けなかった所以である。Jim の最後の場面は、自らに満足し、生涯の恥をすすいで死んで行く、という英雄の光輝を帯びているが、これは *Nostromo* の最後と同様、Conrad が自らの pessimistic な人生観に安住出来なかったことを暗示し、彼のテーマが禁じた明るさへの憧憬を示すと思われる。しかしそれは我々を納得させる力を

持たず、決して作品の効果を強め、統一するものではない。この作品でわれわれを感動させるものは、やはり背景的自然の描写であり、印象派の画を見るような美しいイメージである。  
(12)

### (3) Nostromo (1904)

F. M. Ford によると Conrad は小説を書くことを海以上に憎んだのであった。これは幾分は Conrad が外国の言葉で、即ちポーランド人たる彼が20才を<sup>(13)</sup>過ぎてから覚え、常に慣用語法においては些細な誤りを犯す傾向があり、下手に発音し、しばしばアクセントを間違えた英語で書いたことにもよるであろうが、それ以上に彼の主題がその第一の因であろう。彼の主題が Galsworthy, Bennett, Wells 等の経験したことのない困難をもたらしたのだ。そして彼の芸術家としての真摯な態度がその困難を更に増大する。

彼は *The Nigger of the 'Narcissus'* (1897) につけた序文の中で彼の意図を明かにし、彼の為さんとする仕事は書かれた語の力によって読者に聞かせ、感じさせ、そして何よりも見させることである。と言っているが、これは彼の他の凡ての小説に当てはまる言葉である。彼は自らのこの言葉に飽くまでも忠実であった。彼の小説理論には Maupassant や Flaubert の影響がうかがわれるが、「小説家は芸術上の凡ゆる手段を用いて表現しなければならぬ。その作品は絵画の輝く色合いと、彫刻の立体性と堅固さ、音楽のリズムとハーモニーを備えていなくてはならぬ。」と彼は考えた。それにしても彼の芸術は時として余りに意識的であって、却って効果を損うことがある。*Nostromo* は彼の最も苦心した作品だが、その苦しい彼の努力が読む者の心に伝って来るようだ。

*Nostromo* は革命騒ぎに明け暮れる南米の一共和国の銀鉱が、これは物質的幸福のシムボルなのだが、人々を墮落させ、遂には最も立派な *Nostromo* という男までも征服する物語である。

これは彼の創作力が最高に発揮され、多種多様な人物、事件を通して主題が見事に展開されてゆく、壮大な交響楽ともいうべき作品である。特に舞台となる共和国は強い現実感をわれわれに与える。しかしこの作品は *Lord Jim* ほど

ではないが中々に複雑な形式と精緻綿密な文体によって読者に非常な努力を要し、余程の Conrad の小説愛好家でなければ、読み通すことは困難であろう。Dent 版では約560頁であるが、面白くなって来るのはその半ばを過ぎる頃からである。又人物は他のどの作品よりも多種多様であるが、殆ど凡て内面的輝きを欠き、<sup>(14)</sup>Nostromo ですら外面的な描写は鮮かだが、その魂は生きていない。作品の全体的効果も読む者の努力に十分報いるとは言い難い。<sup>(15)</sup>「しかもなお人生は生きるに価す」という生命的な喜びをわれわれに与えない。われわれを深く感動させるものを仮に詩と呼ぶならば、この詩がないのだ。<sup>(16)</sup>

## II. *The Shadow Line* における scope 限定と詩

自伝的長篇、*The Shadow Line* では Conrad は scope を海における過去の経験に、行動によって完全に処理される問題に限定して居り、又彼の最も愛すべき、明るい海の詩人としての一面が示され、他の作品にみられる種々の欠陥を免れている。<sup>(17)</sup>これは前期の短篇、*Youth* (1898) の場合と全く同じである。

*Shadow Line* とは影の線の意味だが、ここでは初期の青年時代と後期の人間の成熟に近ずいた青年時代との中間の時期を表わす。初期においては人は輝かしい希望で満たされていたが、やがて理由のない不満と退屈に悩まされるようになる。しかしそれに続く様々な試練を経て人は成長して行くのだ。

主要人物は説話者である青年（始めは汽船の一等運転士であるが、後に帆船の船長となる）、その帆船の一等運転士、Burns、それにコックの Ransom この三人である。時は汽船が帆船に代りつゝあった時代、所はシンガポール港、次いでバンコック、シャム湾、最後に又シンガポール港に戻る。

物語は一人称で語られ、単純な、回想の形式をとる。

語り手は船主がアラビア人でシンガポール港に所属する汽船の一等運転士であるが、ある朝目覚めるや、それまで何一つ不満のなかった生活に突然いや気がさし、船長や仲間の止める手を振切って、英国に戻るために18ヶ月暮した船を下りる。海員宿泊所で船を待っている中に、港の事務所から出頭命令があり、行ってみると、バンコックに着いている英国帆船の船長が病死したので、その



後任となることを港務部長から望まれる。これは誠に思いがけない幸運であって、彼の空虚な気分は一掃され、勇躍してその夜一汽船に乗ってバンゴックに向う。遂に自分の船を見、Burns と会う。用船契約その他の繁雑な陸上の事務的な仕事のために何日も河の上に留っている中に、次々と船員が熱病にかかる。漸く河を下り、シャム湾に出るが今度は恐い風<sup>(18)</sup>に遭う。又熱病が起るが、彼とコックの Ransam だけが免れる。Burns は床に就いているが、その風は前船長の呪いのせいだと云う。前の船長は死ぬかなり前から発狂<sup>(18)</sup>していて書夜ひっきりなしにヴァイオリンを弾いたり、理由もなく何日も船を洋上に漂わせた<sup>(18)</sup>りする老人で、船と人とを呪って死<sup>(18)</sup>て、Burns によってシャム湾の入口に沈められたのであった。

ある日彼はキニーネの入っている筈の五本の瓶の中、四本まで砂がつまっているのを発見して仰天する。それは前船長の仕業であるが、出航前によく調べなかった彼の責任である。彼は書夜を分かつ甲板に出て風を待つ。水夫達は手足のバネを失い、亡霊のように力無く頼りないが、命令を受けると厭わずに働く。余りに静かなので彼は時々船を浮ぶ墓場と感ずる。二週間後漸く暗い雲が現れ、風雨が出る。回復した Burns と Ransam と三人だけで船を操って三週間目にシンガポール港に入る。

この作品の形式は彼の諸作に比して甚だ単純でもあるが、それは彼自身の経験を扱い、又人物をよく理解していたためで、複雑な方法を用いる必要がなかったからであると思われる。Burns は感情的、Ransam は理性的な人間としてうまく描かれており、物語の調子ものびやかであって、読者に耳を傾けさせる力を持っている。作品の効果としては、風、光り、闇のイメージが圧倒的であるが、それらのイメージに貫入し、且つ統一を与えているのは帆船のイメージであり、海の詩である。

先ず風、光り、闇のイメージの例を挙げよう。

- (1) The sparkle of the sea filled my eyes. It was gorgeous and barren, monotonous and without hope under the empty curve of the sky. The sails hung motionless and slack, the very folds of their sagging

surfaces moved no more than curved granite

(19)

(海のきらきらした光りが私の眼の中いっぱいにはびこって行った。それは空虚な曲線を描く大空の下、華麗で退屈、変化のない、希望のない姿を見せていた。帆はだらりと動きなく垂れ、そのひださえ刻まれた花崗岩のように動かなかった。)

- (2) A great over-heated stillness enveloped the ship and seemed to hold her motionless in a flaming ambience composed in two shades of blue.

(20)

(大いなる過熱した静寂が船を包み、燃えるような二色の青の中に動けなくするようだ。)

- (3) As I emerged on deck the ordered arrangement of the stars meets my eye, unclouded, infinitely wearisome. There they are : stars, sun, sea, light, darkness, space, great waters, the formidable work of the Seven Days, into which mankind seems to have blundered unbidden.

(21)

(甲板に出ると雲一つない空の整然とならべられた、無限に退屈な星が眼に入ってくる。在るものは唯、星と太陽、海、光り、闇、空間、大きな水の広がりだけであり、神が最初に創った恐るべきものだけであって、人間は招かれもしないのにその中に迷い込んで行ったようだ。)

- (4) The impenetrable blackness beset the ship so close that it seemed that by thrusting one's hand over the side one could touch some unearthly substance. There was in it an effect of inconceivable terror and of inexpressible mystery. .... To look round the ship was to look into a bottomless, black pit. The eye lost itself in inconceivable depth.

(22)

(船を包んだ闇は余りに暗く、舷側から手を突き出すと何か不気味な物質にさわるのではないかと思われる程であった。それは想像も及ばぬ恐怖と表現を絶する神秘感を与えた。……船のまわりを見つめることは底無しの闇の穴を覗くようなもので、眼は想像も及ばぬ深みの中に迷い込む。)

感覚的に類似したイメージ、あるいは対照的なイメージを幾つも重ねて、そのイ

メジが相互に補足拡充し合い、あるいは相互に作用し合って、全体の雰囲気をよく伝えている。<sup>(23)</sup>これが Conrad の散文の一つの特色であって、彼が名詞と形容詞を多く使用するのはこのためである。

次に帆船に関するイメージの例を挙げよう。

- (5) A ship! My ship! She was mine, more absolutely mine for possession and care than anything in the world; an object of reponsibility and devotion. She was there waiting for me, spell bound, unable to move, to live, to get into the world (till I came) ,like an enchanted princess. Her call had come to me as if from the clouds. I didn't know how she looked, I had barely heard her name, and yet we were indissolubly united for a certain portion of our future, to sink or swim together.

A sudden passion of anxious impatience rushed through my veins and gave me such a sense of the intensity of existence as I have never felt before or since. I discovered how much of a seaman I was, in heart, in mind, and as it were, physically, — a man exclusively of sea and ships ; the sea the only world that counted and the ships the test of manliness, of temperament, of courage and fidelity—and of love.

<sup>(24)</sup>  
 (船! 私の船! それは私のもの、世界の他のどんなものよりも完全に私に属するもので、それを私が所有し、世話するのだ。それは義務と献身的奉仕の対象なのだ。それは魔法にかかった王女のように、(私が行くまで) 動くことも、生きることも、世の中に出て行くことも出来ず、私を待っているのだ。その呼声はあたかも雲の上からのように聞えて来た。私はそれがどんな様子をしているかも知らない。名前を聞いたただけなのだ。しかし私達は将来の一定期間しっかりと結ばれ、進むのも沈むのも一緒なのだ。

不意にじっとして居れない熱い血が血管を駆け回り、以前にも以後にもなかった程、生を強烈に意識させた。私は今にして自分がどれほど船乗りに適わしい感情、精神、体を持っているかを知った。私は海と船だけに属す人間なのだ。海は価値ある唯一つの世界で、船は男らしさを試し、気質を、勇気

を誠実さを、そして愛情を試すものなのだ。)

これは船長に任命されたばかりの語り手が思いがけぬ喜びに酔っているところである。次の例と同様、久しく聞かれなかった Conrad の抒情的リズムの再現である。

- (6) At the first glance I saw that she was a high-class vessel, a harmonious creature in the lines of her fine body, in the proportioned tallness of her spars. Whatever her age and her history, she was one of those craft that, in virtue of their design and complete finish, will never look old. Amongst her companions moored to the bank, and all bigger than herself, she looked like a creature of high breed—an arab steed in a string of carthorses.…… She was like some rare women, she was one of those creature whose mere existence is enough to awaken an unselfish delight. One feels that it is good to be in the world in which she has her being.

(25)

(一目で私はそれが高貴な階級に属すものであることを知った。美しい外形線と高い帆柱を持った調和のとれた船なのであった。それは年齢が何才になろうと、過去の経歴がどんなものであろうと、設計と完璧な仕上げの為に、決して老いぼれては見えない船の一つなのだ。岸に繋がれたもっと大きな仲間の間では、高貴の生れの如くに見え、駄馬の一隊にまじったアラビア馬のようだった。……それはこの世にまれにしか存在しない婦人のようだった。唯存在するだけで人の心に没我的な喜びを呼び起す、そういうものの一つなのだ。それは同じ世界に生きることの喜びを人に感じさせる。)

これは語り手がバンコックで始めて自分の帆船と対面するところである。帆船を駄馬にまじったアラビア馬に、又類まれな美女にたとえて熱情を吐露しているのだが、それは彼が概して男女間の愛を描くことに拙かったことの、又この作品に女性が一人も登場しないことの埋合わせを為しているようだ。

ところで闇の夜となると、帆船は専ら羅針盤と舵輪、それに舵手のイメージに

よって代表されているが、次の例が示すように、人間の意志が運命を作るといふ象徴的な含みを持っている。

- (7) The only spot of light in the ship at night was that of compass-lamps, lighting up the faces of the succeeding helmsmen; for the rest we were lost in the darkness, I walking the poop and the men lying about the deck.

(26)

(夜の船内の唯一の明るい場所は、羅針盤のランプに照される所であって、その光りは交代で現われる舵手の顔を照らすのであった。私は船尾楼甲板を歩き、水夫達はデッキのあちこちに横たわっていたが、われわれは皆闇の中にのみこまれていた。)

- (8) I raised my voice not much above a whisper, and, noiselessly, an uncomplaining spirit in a fever-wasted body appeared in the light aft, the head with hollow eyes illuminated against the blackness which had swallowed up our world—and the universe. The bared forearm extended over the upper spokes seemed to shine with a light of its own.

(27)

(私は囁くような声で云ったのだが、熱病に食い荒らされた肉体に包まれた、不平を云わぬ魂が、音もなく船尾の光りの中に現われ、眼の落ちくぼんだ顔が、世界を、宇宙をのみこんだ闇の中に、くっきりと照らし出された。舵輪の取手の上に伸ばされたその裸かの前腕は、自らの光りで輝くようだ。)

Conrad の文学の一つの特性は、よく云われることだが、romance と realism の融合である。そして彼の場合、その realism を支えるものは ironic な精神であると云うことが出来よう。何となれば後期においては彼の irony は姿を消し、romance は realism から離れているからである。*The Shadow Line* (28) では彼の ironic な物の見方、表現の仕方が殆ど一貫して保たれていて作品を引締め、他の多くの作品において示された、人間の犯す裏切り、臆病な行為、善をのみこむ悪等々の、過度とも思われる Conrad の意識は見られず、彼の irony はすぐれた humour に上昇することはあっても、cynicism に下

降することはない。かくしてそれは海の詩人たる Conrad の力が十分に発揮された作品となったが、これも scope 限定の結果であると考えられる。

彼の多くの小説にみられる対象への間接的接近、心理分析の微妙さ、そして高度の知性と技巧は、われわれに Henry James の小説を思わせる。Conrad は James と親しく交わり、疑いもなく、多少の影響は受けたのである。しかし彼の散文には James のそれとは異って、海や船の、又熱帯地方の自然の詩がある。彼の視覚は事物を非常なる想像的エネルギーで捉えるので、それは単なる外面世界の美しい描写に終ることなく、シムボルにまで高められて行く。生の表面、地の表面を神秘的に靈化するのであり、それは不意に行動や景色の輪廓の上に詩的な魅惑を投げかけ、未知の世界を夢幻的に暗示するのだ。彼の描き出す情景は多種多様であるが、海のイメージが中心的であり、更にその海の中には帆船があるのである。われわれが芸術的迫力、詩的情熱の点では幾分 *Youth* に劣る *The Shadow Line* をとり上げたのは、この作品が一般には余り知られていないこと、又全般的不振の後期にあって唯一つ光った存在であることの為でもあるが、何よりも Conrad の帆船に対する愛が最も明瞭に示されているために他ならない。

— 註 —

(1) 彼は1886年から1910までに長篇7、短篇20を出した。

(2) cf. Oliver Warner : *Joseph Conrad (Lougmaus, 1951)*, P.84.

Douglas Hewitt : *Conrad, A Seassessment* (Bowes S Bowes, Cambridge, 1950), P.112.

Albert J. Guerard : *Conrad the Novelist* (Harvard Univ. Press, 1958), P. 32.

(3) cf. A. S. Collins : *English Literature of the Twentieth Century* (London, 1956), P. 186.

(4) cf. Hugh Whalpole : *Joseph Conrad* (London, 1929), P. 72.

(5) cf. Thomas Moser : *Joseph Conrad, Achievement and Decline* (Harvard Univ. Press, 1957), P. 128.

(6) op cit., Arthur Symons : *Notes on Joseph Conrad* (London, 1925), PP.7—8.

- (7) cf. Walter Allen : *Six Great Novelists* (London, 1955), P. 170.
- (8) cf. J. W. Beach : *The Twentieth Century Novel* (London, 1932), P.363.
- (9) *ibid.*, P.337.
- (10) *ibid.*, P. 360.
- (11) Conrad は「物語の本質は核のように中にあるものではなく、外側から物語を包んでいるものだ」と云った。cf. E.H. Viseak : *The Mirror of Conrad* (Werner Laurie, 1955) , P. 101.
- (12) cf. 沢村寅二郎, 「コンラッド」 (研究社, 昭9年), P.62.
- (13) cf. Beach, P. 339.
- (14) Conrad 自身 *invention* に対する適性を有しないことを告白したことがあった。  
cf. Richard Curle : *Joseph Conrad and his Characters* (Heineman, 1957), P. 12.
- (15) *Nostromo* の効果については Warner, P. 104 を参照せよ。
- (16) Conrad の小説に見出される詩については, Albert J. Guerard, P. 13 を参照せよ。
- (17) cf. Hewitt, P. 113.
- (18) Warner は「Conrad の複雑さはその無比の技術に示されているが、彼を不朽にするものは単純性だ」と云っている。  
cf. Warner, P. 180.
- (19) Tauchnitz 版では P. 179.
- (20) *ibid.*, P. 158.
- (21) *ibid.*, P. 192.
- (22) *ibid.*, P. 212.
- (23) cf. 東田千秋「*Nostromo* の文章」研究社, 市河博士還歴祝賀論文集, 昭21年, PP. 35—44.
- (24) *The Shadow Line*, PP. 80—81.
- (25) *ibid.*, P. 97.
- (26) *ibid.*, P. 192.
- (27) *ibid.*, P. 219.
- (28) 彼の *irony* については詳しくは Moser : *Conrad, Achievement and Decline* を参照せよ。
- (29) cf. Legouis & Cazamian : *History of English Literature* (Dent, 1957), P. 1334.